

---

# われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

十四万宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

### 【Nコード】

N3263D

### 【作者名】

十四万宮

### 【あらすじ】

この春、はれて私立桜ヶ丘高校に入学することになった俺、九条春樹は、幼馴染の巴真樹奈、腐れ縁の北沢涼とともに吹奏楽部へと入部する。そこで待っていたのは個性豊かな部員達だった！？

## プロローグ（前書き）

御覧になってくれてありがとうございます。十四万宮と申します。私は実際に打楽器をやっていましたが、金管や木管はやったことがないのでその辺りは（練習風景など）想像で補っています（笑）なので、おかしいと感じる点などありましたら指摘して頂けると助かります。では、至らないところが多々あるとは思いますが、どうぞお楽しみください。

## プロローグ

届いてくれるといいな

君の分かんないところで

今、僕も

奏でてるよ

Mr. children  
「sing」より

## 一話・春の朝

春眠、暁を覚えず。

とは上手い言葉だ。さすが、昔の人はいいことを言う。

実際に体験すると分かるが、春の暖かい日ざしに包まれながら心地よく目を覚まし、顔を洗い、歯を磨くなんて並大抵の精神力ではこなせるはずがないのだ。

そして俺はそんなに強靱な精神力を持ち合わせていない。

つまり、二度寝をするという結論に至るわけだ。

ではおやすみ。

グッバイ、太陽。

萌

「くおーらー！春にい！なに二度寝してんのー！」  
ガバツ！と布団を剥がされる。

春樹

「うおっ！寒っ！」

今年の春は寒いらしい。

萌

「春にい、今日始業式でしょ！？もう八時過ぎてるよ！遅刻だよ！  
ち・こ・く！」

あーそうそう。そういえば今日は始業…

春樹

「ってうおい！！それを早く言わんかー！」

萌

「さっきからずっと言っていましたけど？もう外で真樹奈さん待ってるんだから早くしてあげたら？」

私はもう行かないといけないから！

じゃーねー！」

そう言い残すと萌はピュン！といった感じの勢いで部屋から出ていった。

さて、着替えながら萌について説明しよう。

九条萌。俺の一個下の妹。桜ヶ丘高校に近い場所にある美咲中学に通っている。ちなみに、俺と真樹奈もその出身。

毎朝起こしに来る。

まあなんだかんだいって兄が起きるまで家にいてくれるんだから良い妹なんじゃないかと思ってる。

あれ、下のズボンどこいった？

身長は低め、っていうか服だけ替えれば小学生で通るんじゃないだろうか。

部活は手芸部。

暗いところと雷が苦手。

好きなものはパフェと猫。

俺が知ってるのはこのくらい。

さてと、行きますか。

朝飯は気合いでカバーするとして、昼は学食でいいか…。金あったかなあ？

玄関を出たところで声をかけられた。

真樹奈

「もっつ！遅いよ！？今日は始業式なのに…」

春樹

「まあまあ…。そんな怒るなよ…。近いんだから早歩きしてけば全然間に合っつて。」

真樹奈

「何言ってるのー！！始業式は普通の時より30分早く行かなきゃいけないって先生が言ってたでしょ！」



…。

春樹

「…走る？」

真樹奈

「当たり前でしょう！」

…はい。

朝から走ることになった。

いや、自業自得なのだが。

こんな時間まで俺を待っていてくれたのは誰なのかというと、俺の家の隣に住んでいて、幼馴染でもある、巴真樹奈だ。夜は窓越しに会話、なんてことはないから変な妄想はしないでいたきたい。

いや、少しはするか…。

部屋は向かいだと言っておくぜ。

俺と同じく美咲中学出身。ていうか生まれた頃からほとんど一緒に過ごしてきた気がする。うん、だから幼馴染なんだけど。

小学校から中学校までずっと同じクラスだった。

唯一離れたのは中学の時、俺は陸上部だったけど、真樹奈は吹奏楽

部だったこと。それくらいしかない。

小さい頃は俺にベツタリだった気がする。

思えばあの頃は可愛かった…。

…いや、今でも十分に可愛いんだが。俺の傍においておくのが勿体ないくらい。

なんだろう？感覚の麻痺？

ずっと傍にいとその本当の価値に気付かない、って言うじゃん？

今だって、さすがにベツタリまではいかないが、結構一緒に居る時間が多いほうだと思う。

女の子っていうよりは、妹みたいな感じだな。

でも、それはあっちも同じだろう。

最近は高校に入ったら吹奏楽部に入るように！と、しつこい勧誘が続いている。

入ってやつてもいいと思うけど、陸上部に入るかどうかで気持ち揺らいでいるのが現状だ。

真樹奈

「ねえ、まだ朝ご飯食べてないでしょ？」

走りながら真樹奈が聞く。

春樹

「ご名答！」

真樹奈

「自慢して言うことじゃないの！」

えと、サンドイッチならあるけど、食べる？」

春樹

「おお！さすが真樹奈！」

真樹奈

「朝の余りだから気にしないで。で、食べるの？」

春樹

「じゃ、遠慮なく。」

うむ、やはり真樹奈のサンドイッチは旨かった。

桜ヶ丘高校前

真樹奈

「はっ、はっ、疲れたあ……」

春樹

「良かった。間に合ったな。」

真樹奈

「な、なんで平気なの!？」

「十分くらい走りっぱなしだったのに…」

ぜえぜえと息を乱しながら真樹奈が聞く。

春樹

「おま、当たり前だろ。」

俺、中学三年間長距離の選手やってたんだぞ?これでもエースだぞ?」

真樹奈

「そつか…そだった…」

でも、高校は吹奏楽部に入るって…」

春樹

「はいはい。後でな。」

真樹奈がぶーぶー言っただような気もしたが、気にしない気にしない。

この後、クラス分けを見に行ったらまた真樹奈と同じクラスだった。

…やっぱりなんかあんのかな。

そしてクラスに滑り込み、出席も終えて、始業式に向かった。

面倒なので省略。

校長

「えー私は毎日玉葱を五個食べています」

校長w

司会進行役の教師

「えーこれにて始業式を終了とします。3年生は後ろから、2年生は前から出なさい。」

∴1年生は少し待っているように。」

ん？

春樹

「なあ真樹奈。」

真樹奈

「うん。何かあるのかな？」

春樹

「いや、俺も分からん…。」

待つこと五分。



司会進行役(?)の生徒

「では、これより、新入生歓迎会を執り行います!」

こうして俺を桜ヶ丘高校吹奏楽部に導いたイベントが始まったのだ  
った。

## 一話・春の朝（後書き）

文才が無くてすいませんです。さっそく萌と真樹奈が被りそうな気がします。更新頻度は一週間に一回くらいです。見守っていただけたら幸いです。では、今後もよろしくお願いします。十四万宮

二話・三人よれば

なんでやねん！  
…

…

柔道部の下らないエセ関西弁漫才はまだ続いている。

真樹奈

「えと、次はパソコン研究部だつて」

春樹

「ん、ああ…」

名前の順で並んでいたはずなのに、何故真樹奈がこんな前の方にいるのかすぐには分からなかったが、周りを見渡すと、理由はすぐに分かった。

やはり、美咲中からの進学者が多いためか、皆自由に固まり始めていた。俺の知っている顔も何人か見つけられる。

後で声かけにいく。

真樹菜

「次は、鉄道研究部だね。」

気が付くともうパソコン研究部の紹介は終了していた。

どうやらこの  
「新入生歓迎会」  
は、要するに  
「新入生勧誘会」  
ということらしい。

新しく入ってきた新入生の興味を引くために様々なパフォーマンスを披露するのだ。

それが柔道部の場合は漫才であったり、パソコン研究部の場合は妙なマジックショーであったりするわけだ。

つまり、まったく部活と関係ないことをやっても、面白ければOKという雰囲気の中進行していく行事らしい。

鉄道研究部が終わったところで、何だかもう飽きてきてしまった俺はうつらうつらと舟を漕ぎ始めた。

真樹菜は真剣にいろんな部活紹介を見ているが、俺にはとても出来ないぜ…

今日の朝、寝坊したってことはつまり昨日の夜寝てないわけで…

でもこの部活紹介はつまらないわけで…

僕は眠いわけで…

眠るわけで…

？

「よお、やっぱ二人はいつもペアだな！」

こいつは…

真樹菜

「あ、涼くん！おはよう！」

涼

「おはよう、真樹菜ちゃん＆春樹くん」

春樹

「君付けすんな、気持ち悪いから」

北沢涼。

幼馴染というか、腐れ縁というか…

真樹菜と二人じゃないときはいつもこいつとペアになるのは俺で、三人ペアの時も大抵は、

俺、真樹菜、涼である。

涼とは小学校からだが、同じクラスになった小一の時からずっとつるんでいる。

クラスこそ違えど、長い間付き合っている。

やっぱり、腐れ縁というじゃないだろうか、こいつは。

中学の時は俺と同じ陸上部で、こっちは短距離のエースだった。

で、まあ、こいつはそれなりにモテた。

ていうかかなりモテた。

…いいもん、俺には真樹菜がいるもん。

やっぱり幼馴染っていいもんだな…。

俺はモテた、というには微妙で三回ほど本命のチヨコをもらったくらいだ。

まあ全員丁重にお断わりしたが。

真樹菜からのチヨコは数に入れてない。

なんていうか、本命ではないし、毎年貰って俺もお返しする、とい



うのが当たり前になりつつあるからだ。  
その日だけは俺は羨望の視線を集める。

なぜなら…。

真樹菜もモテるからだ…

中学三年間で五十人斬り。

宮本武蔵もびつくりだぜ！

いかん、興奮しすぎて動悸が…

救心飲まなきゃ…

真樹奈

「…ねえ、聞いているの！？」

春樹

「おわっ！」

不覚にもうつらたえてしまった。

真樹奈

「やつぱりボーッとしてた…」

…あのねえ、涼くんが吹奏楽部に入るんだって!」

春樹

「へえ、マジか？」

てか、なんか楽器出来んのか？」

涼

「ああ、マジだ。こう見えても俺はドラマーなんだぜ?」

春樹

「初耳だな…」

十五年目の真実。

真樹奈

「よし!じゃあ春樹も吹奏楽部に入…」

春樹

「まあまあまあ、ちょっと考えさせてくれよ…」

これは…、どうすべきなんだろうか…

真樹奈

「絶対入らなきゃダメだからね」

春樹

「うん…」

司会

「最後は、吹奏楽部です」

二話・三人よれば（後書き）

打ち切りあるかもです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3263d/>

---

われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

2010年11月16日18時44分発行